



福岡銀行

グループの力を結集し、
地域発展のために前進する。

株式会社
谷口グループ

代表取締役
浅地裕太郎氏

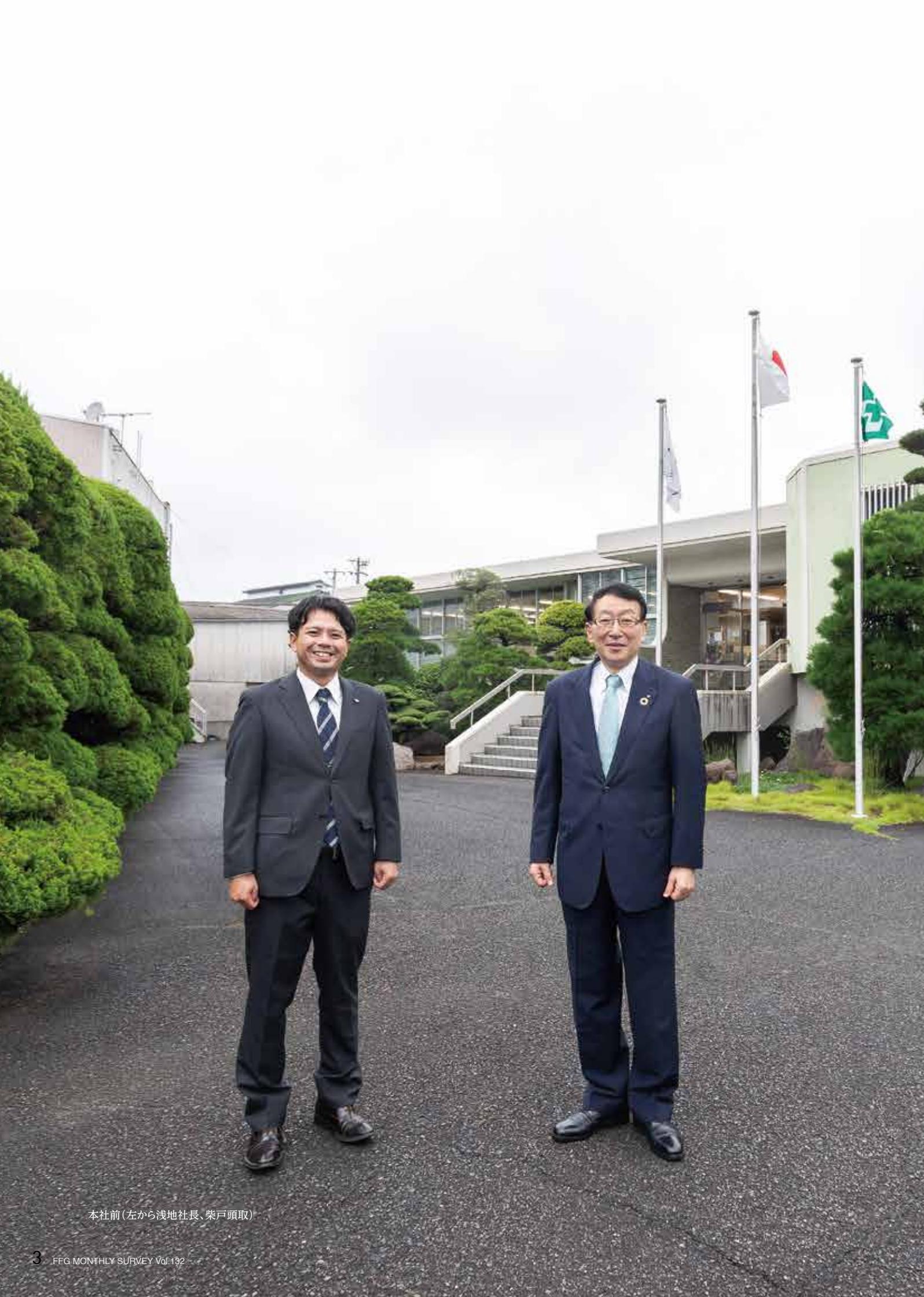
取引店／福岡銀行 後藤寺支店

■会社概要

創業:1955年／設立:2020年／所在地:福岡県田川市／従業員:86名／事業内容:(谷口組)土木工業、建築工事業、水道施設工事業、とび・土木工事業、舗装工事業、鉄筋工事業(谷口商事)砕石・セメント・生コン・各種建材販売、不動産業、各種保険取扱等(谷口運輸)セメント、砕石等運送業(谷口石油)石油・灯油・ガス・タイヤ販売(麻生田川コンクリート工業)生コン製造・販売・輸送／グループ企業:株式会社谷口組、谷口商事株式会社、谷口運輸株式会社、株式会社谷口石油、麻生田川コンクリート工業株式会社

会社ホームページは
こちらからどうぞ!





本社前(左から浅地社長、柴戸頭取)

石炭衰退を乗り越え

「和」をモットーに基礎を築く

私たち谷口グループは、1955年に会長・谷口松太郎まつたろうが興した土木建設請負業の谷口組を中核として、グループ5社が65年の歴史を経て今年9月に統括会社を設立し、新たな一歩を踏み出しました。

振り返ってみますと谷口組がこれまで歩んだ道は、ここ田川の地のみならず、筑豊地域、いやわが国にとって激動の時代だったと思います。

明治期から基幹エネルギーであった石炭は「黒ダイヤ」と呼ばれ、筑豊炭田は日本最大の産炭地としてわが国の近代化を支えました。三井田川鉱の「2本煙突」は「月が出た出た」の炭坑節にも歌われていますが、昭和20年代から始まる石炭から石油へのエネルギー革命によって、石炭産業は斜陽化していきます。

谷口組が産声をあげたのはその頃で、地域経済が厳しさを増す中でしたが、松太郎会長は自ら土木建設請負業を興し、何よりも

「お客様・地域を大切に」という信念を貫いて、公共工事や企業の仕事を請け負い、「谷口組に任せたら良い仕事をしてくれる」という厚い信頼を得ることを目指し、事業を拡大していきました。

石炭産業が衰退する一方で、筑豊各地でセメント原料となる石灰石鉱山が開発され、「黒ダイヤ」に代わって「白ダイヤ」と言われるほど脚光を浴びたことも追い風になりました。

石灰石採掘やセメント製造に関係する仕事も増える中で、石油スタンドを開設。鉱山部と運輸部を谷口組から分離し、石油販売部を加えて谷口商事を設立しました。さらに事業拡大に伴って谷口商事の運輸部、石油販売部を分社化し、総合事務所を田川市弓削田の現在地に開設しました。

2004年には麻生セメントから麻生田川コンクリート工業の経営を引き継ぎ、谷口グループとして操業を開始しました。そして今年9月に、これら5社の強みを活かすべくグループ統括会社を設立しました。

2 1



3



トヨタ自動車から転身 祖父の生き方に学ぶ

私は、松太郎会長の孫として田川で生まれ、福岡市内で育ちました。福岡県立修猷館高校から九州大学に進み、愛知県のトヨタ自動車に入社しました。

トヨタ時代は本社の人事部門で勤務していましたが、そこでは多くのことを学ばせていただきました。有名となったトヨタの「カイゼン」は、現場で働いているメンバーが知恵を出し合い、解決策を自ら考えて提案し、仕事の内容を改善していくことですが、これが世界トップ

の自動車メーカーになった原動力であり、いつまでもトヨタで教え育てていただいたことは私の中にしっかり生きていくと思えますし、何か恩返しができると思っています。

2018年12月、31歳の時に私はトヨタを退職し、谷口組の取締役部長として入社しましたが、会長から「跡継ぎになれ」と言われたことは一度もありませんでした。

自動車メーカーからの転身には自分自身にも迷いはありましたが、「自分しかやる人はいない」という思いで決断しました。私が断ってしまうと会長の思いは後世まで残すことはできないのです。

私は会長と離れて育ちましたが、田川に帰って来るたびに随分可愛がってもらいましたし、常に地域や業界、会社への想いを話してくれていました。3歳の頃、会長に抱かれてトラックに乗せてもらった楽しい記憶は今でも鮮明な思い出となっています。

会長から事業や想いを受け継ぐことを迷わなかったのは、おそらく子どものころから、会長の存在や想いを身近に感じ、会社で働く



浅地社長



4



8 6



5



7

1.対談風景/2.実績紹介:蛇牟田川排水樋管新築受託工事/3.創業者の谷口松太郎会長、谷口スミ子相談役夫妻/4.コンクリート運ぶロケット型アジテータトラック/5.生コンクリートプラント操作盤を見学/6.谷口運輸株式会社/7.本社に隣接する谷口石油/8.企業メッセージ



麻生田川コンクリート工業 敷地内にて(左から麻生田川コンクリート工業 鶴田社長、谷口グループ 浅地社長、谷口スミ子相談役、谷口松太郎会長、柴戸頭取、中狭支店長(福岡銀行)、若水課長代理(福岡銀行))

皆さんの優しさ、温かさに触れ、田川の地に親しんでいたからでしょう。今考えてみると、小さな頃から私の中に「いつかは後継者になるんだ」という気持ちがあったのかも知れません。

**「謙虚・感謝・素直・正直」に
100年企業と
地域への恩返しをめざす**

谷口組はこれまで道路整備・改良、公営住宅、児童養護施設の建築などの公共工事から病院、スーパー、飲食店、個人住宅の新築までさまざまな実績を積み上げ、地元・田川の方々から厚い信頼をいただいています。

会長は創業時に、「精神 責任 和」を社訓に掲げ、強いリーダーシップによって会社を引っ張ってききましたが、私は会長の志を受け継ぎ、5つの会社が1つのグループとして結束し、社訓に掲げる「和」の精神によって、組織の力を発揮させたいと考えています。

そのためには小さなことの積み重ねを大事

にしています。私は率先して現場を回り、現場で働くメンバーの声に耳を傾けることは当然とし、現地現物で考え、判断すること、「ホウレンソウ（報告・連絡・相談）」を重視し、情報を共有して知恵を出し合うことによつて組織としての力を高めていけるように努めます。

会長は91歳になった今でも元気で、会社の精神的支柱として、私たちを温かく、時には厳しく見守ってくれています。私は、地元に必要な足跡を残した「谷口松太郎の孫」ということで、プレッシャーもありますが、会長夫妻の生き方でもある「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という教えを大切に、「謙虚・感謝・素直・正直」をモットーに、地域への恩返しに努めていきたいと思っています。自分一人の力は小さい、周囲の支えがあるからこそ会社は運営できる、地域の支えがあるからこそ会社は発展する、と胸に刻んでいます。

また地域貢献は創業時からの会長夫妻の教えでもあり、石炭記念公園で保存されている「2本煙突」のライトアップにも会長夫妻は

私費で協力するなど、市民の方々に喜んでいただけました。今年5月には新型コロナウイルス感染症防止に役立てていただくために取引先を経由してマスク1万5千枚を調達し、田川市に寄贈しました。マスクは田川市内の私立幼稚園・保育所など児童福祉施設25ヶ所の職員の方々に配布していただいたようです。

当グループがいま目標としているのは「100年企業」と「地域への恩返し」です。現在、谷口組と谷口商事の売上高が全体の6割前後を占めていますが、これからはグループ会社間の連携を強化することによつて、それぞれの会社が持てる力を十分に発揮することで、必ずや達成できると思っています。

これまで培ってきた経験・技術力・知恵を活かして、さらに創造力と感性を磨き、お客様のニーズをしっかりと把握するために現場力を高め、お客様の「知恵袋」となるような提案力を強化し、「幸せ・喜び・安心・育み」をキーワードに、お客様と地域に新たな価値を提供することに邁進したいと考えています。

■ インタビューを終えて

福岡銀行 取締役頭取 柴戸 隆成

浅地社長は、谷口松太郎会長が地元・田川のために興された事業を受け継ぎ、企業グループの若きリーダーとして新たな歴史を歩まれました。地域と地域の人々を大切にする企業理念を実践され、長年培われた厚い信頼に加えて組織としての力を発揮されています。

これからも田川を代表される企業グループとして成長を続けられ、地域発展に尽力されることを期待しています。





熊本銀行

末永く親しまれる味と
憩いの場を提供しつつ、
文化の継承と社会貢献に尽力する。

有限会社 親和商事
代表取締役社長
倉橋 篤氏

取引店 / 熊本銀行 下通支店

■会社概要

創業:1949年 / 設立:1971年 / 所在地:熊本市
中央区 / 資本金:500万円 / 従業員:45名(正社員
27名) / 事業内容:飲食サービス業(日本料理)

会社ホームページは
こちらからどうぞ!



「郷土料理 青柳」前(左から倉橋社長、野村頭取)



◇釜飯定食の店◇から ◇日本料理店◇へ業態転換

「郷土料理 青柳」を運営する当社のルーツは、創業者・松村四郎が始めた水菓販売です。

水菓販売の傍ら不動産事業を展開していた四郎は、そこで得た資産を元手に、釜飯を供する和食店を構えました。当時、釜飯は高級なご馳走でしたので、「子どもの頃、お祝い事があると親に連れてきてもらった」と、話をしていただけのお客さまもいらつしやいます。

1971年、二代目社長兼初代女将となった創業者の長女・松村勝子の時に高度経済成長期における接待需要の高まりに伴って、釜飯主体の定食スタイルから会席料理へと業態を転換しました。

北海道・札幌で教員の家庭に生まれた私は、北海道大学経済学部を卒業し、東京の大手建設会社に入社します。そこで将来、二代目女将となる先代の長女・恭加と出会い、職場結婚したのです。その後、二人で家業を継ぐ決心をして建設会社を退職。ほどなく日本を代表する老舗日本料理店「なだ万」で修業することとしました。私は板前として、妻は仲居として

それぞれ3年間、和食店のいろはを学びました。修業後は熊本で親類の日本料理店の立ち上げに関わった後、晴れて「老舗和食店 青柳」の一員となったのです。

老舗和食店の発展を阻むのは 「板前vs仲居」の対立構造

異業種から転身して日本料理店に入った私が、強く違和感を覚えたのは、調理場を預かる板前さんたち、接客を取り仕切る仲居さんたち、お互いの意見が、ことごとくぶつかってしまふ場面でした。これは、私が働いた店に限らず業界全体の傾向といえるだろうと、個人的には感じています。どちらもプロフェッショナルとしての誇りがあり、両者とも自分の持ち場の仕事は一生懸命やっている。それなのに、職人気質から生じる頑なさや邪魔をして、接点の部分で折り合えないところがあるのです。

熊本地震の後、当地の料亭街にあった老舗が次々と閉店しましたが、話を聞いてみると、経営難ばかりでなく職場における人間関係の根深い問題が引き金となったケースもあつたようです。当社でも、昔ながらの職人気質



5



3



1



6



4



2



倉橋社長

についていけない若手の離職は、長い期間にわたつての課題でしたから、2012年に当社の三代目社長となった私が最初に着手したことが、職場の改革でした。

皆を集めた場でまず私が話したことは「ここで一番偉いのは社長じゃない。もっとも尊重されなければいけないのは、会社の理念を具現化する言葉、『親和・真心・勇気』です」と。当社の社名にもなっている、創業当時の社訓ですが、ともに働く仲間を大切にすることで、お客さまのために勇気をもって行動でき、美しくおいしい料理と心に残るサービスを提供できる、と考えたからです。

具体的な施策として、毎日、皆で社訓を唱和するところから始め、板前も仲居も一緒に

なったグループを作つて定期的に行う勉強会、従業員同士が互いの努力を評価し合つて行うスタッフ表彰式、サプライズ誕生会などを実施し、職域の垣根を越えた交流と、若手でも気兼ねなく意見を言いやすい雰囲気づくりに努めました。その結果、職場の空気が徐々に変わつていくのが感じられるようになりました。

熊本地震をきっかけに 一気に育まれた結束力

職場改革の一番の転機となったのは、図らずも2016年の熊本地震でした。1か月ほどの休業を余儀なくされ、皆で話し合った結果、炊き出しを行うことに。普段は、調理場とお客さまの傍ら、それぞれに分かれて働く従業員たちも、お互いの真剣な様子とプロとしての行動を間近で目にして、お互いを尊重し合う気持ちが高まったようです。

また、炊き出しに集まった地元の方たちから感謝の言葉をたくさんいただいた経験が、各自の励みとなり、仕事に対する意欲向上へとつながりました。経営面では震災による痛手は途方もなく大きかったのですが、あの経験



1.吹き抜けの滝がお迎える1階入り口／2.2階。個室の椅子席／3.4.1階のカウンター／5.3階の大広間。最大74名まで対応可／6.5階特別室にて／7.看板メニューの釜めしを堪能／8.熊本城本丸御膳(要予約)／9.コース料理(写真はイメージ)／10.地酒も取り揃えたワインセラー／11.店舗メッセージ



前列左2番目から女将の倉橋恭加氏、倉橋篤社長、野村頭取、大原支店長(熊本銀行)

で手にできたものは、かけがえのない財産だと思えます。

飲食業界を直撃したコロナ禍とも闘いながら店舗を再建し、5月にリニューアルオープンを果たした今、百年企業を目指して進化していくために、献立を毎月見直して新たに作り組みを続け、スタッフ全員の意見を取り入れながら進めています。料理を作る者も提供する者も、協力して知恵を出し合える職場の雰囲気これからも大切にしていくつもりです。

築城400年を記念した

「熊本城本丸御膳」再現に挑戦

当社にとつての転機という意味では、熊本城築城400年を記念した「熊本城本丸御膳受託」事業への挑戦も、貴重な経験でした。200年前に書かれた料理秘伝書や食品・調理に関する資料をもとに、熊本名物も取り入れつつ現代の嗜好に合わせ、試行錯誤の末に再現した「熊本城本丸御膳」。その城内での提供は話題性も手伝って、さまざまなきっかけ、周囲からのありがたい評判をもたらしてくれ

ました。2008年から約7年取り組んで、震災後は城内での提供はできなくなりましたが、今でも当店での提供を続けています。

第三者からの評価でいうと、震災後まもなく、人と会社、地域を輝かせる「プライト企業」として熊本県から認定されました。当時、飲食店としては唯一の認定でした。

さらに、昨年11月には、熊本商工会議所の創立140周年記念式典において「人を幸せにする経営大賞」をいただきました。ベテランの技を「見て覚える」従来の業界独特のやり方を、指導時間をしっかり設けるよう変更した点や、互いの努力を評価し合う制度などが受賞の決め手となったそうです。

今後は、4年間離職者ゼロの記録をさらに伸ばすことと、飲食サービス業従事者の社会的地位の向上も目指していかれたらと考えています。

伝統文化継承のために 地球環境保全のために 目の前のできることから

地域や社会への貢献もまた、私たちの目指す

ところでは、それぞれに趣の異なる個室でお客様に食事をゆったり楽しんでいただける空間の提供は、当店の特色。そればかりでなく、広間を伝統文化の継承と啓蒙の場としても役立てたいとの思いから、地域で活動する子ども舞踊団「花童」の踊りと熊本民謡を堪能していただけるサービスを始めました。

それから、飢餓に苦しむ人が世界中で約8億人いるといわれるなか、日本では輸入に頼りながらも大量の食品が廃棄され続ける「フードロス」問題にも向き合っています。フードロス削減および、限りある資源を大事に使う取り組みとして、以前は廃棄していたかつお節のだしがらを、地元食品メーカーの協力を得て「もったいなかつお」というふりかけに生まれ変わらせているほか、国産杉の割り箸は、使用後に洗浄して工場に送り、炭に加工しています。

これからの将来を生きる子どもたちのためにも、私たちは社会の一員としての責任を果たしていきたいと考えています。

■ インタビューを終えて

熊本銀行 取締役頭取 野村 俊巳

歴史ある日本料理店として、この熊本の地で永く地域に親しまれ続けておられます。倉橋社長は経営を引き継がれてすぐに職場の改革を断行されましたが、その経営手腕は数々の表彰を受けるほどに認められています。

熊本地震やこのたびのコロナ禍など未曾有の危機に直面しながらも、地域や従業員を守る取り組みを続けておられますが、この危機を乗り越え、熊本を代表する百年企業を目指して、今後も挑戦を続けられることを願っています。





十八親和銀行

「共生」と「創生」をめざし
地域を支える事業を展開する。

株式会社 三基^{さんき}

代表取締役社長

山口 雅二^{やまぐち まさじ}氏

取引店／十八親和銀行 本店営業部

長崎営業部

福岡銀行 長崎支店

■会社概要

創業:1951年／所在地:長崎市大橋町／資本金:
2,000万円／従業員:74名／事業内容:総合土木
建設業(土木・建築・港湾)、バイオマスボイラー
製造、埋蔵文化財発掘、太陽光発電事業／事業
拠点:(本社)長崎市大橋町(支店・営業所)福岡
支店、諫早営業所、島原営業所(工場)女神工場

会社ホームページは
こちらからどうぞ!





本社前
(左から山口社長、森頭取)

港湾土木工事で創業 磨いた技術と堅実経営で拡大

当社は1951年、港湾土木工事を主体として第一歩を踏み出しました。創業時は「三基興業株式会社」という社名で、創業者である坂口義雄氏ら3人が、力を合わせて発展させようという願いを社名に込めたと聞いております。現在は「株式会社三基」と社名は変更していますが、原点を忘れないよう今でも「三基」という名前は残したままにしています。

多くの離島を抱えた長崎県は、北海道に次ぐ長い海岸線を有し、多数の有人離島があります。国・県も排他的経済水域の保全などの面から、港湾設備の整備に力を入れており、当社はこれら港湾関係工事によって業績を伸ばしてまいりました。

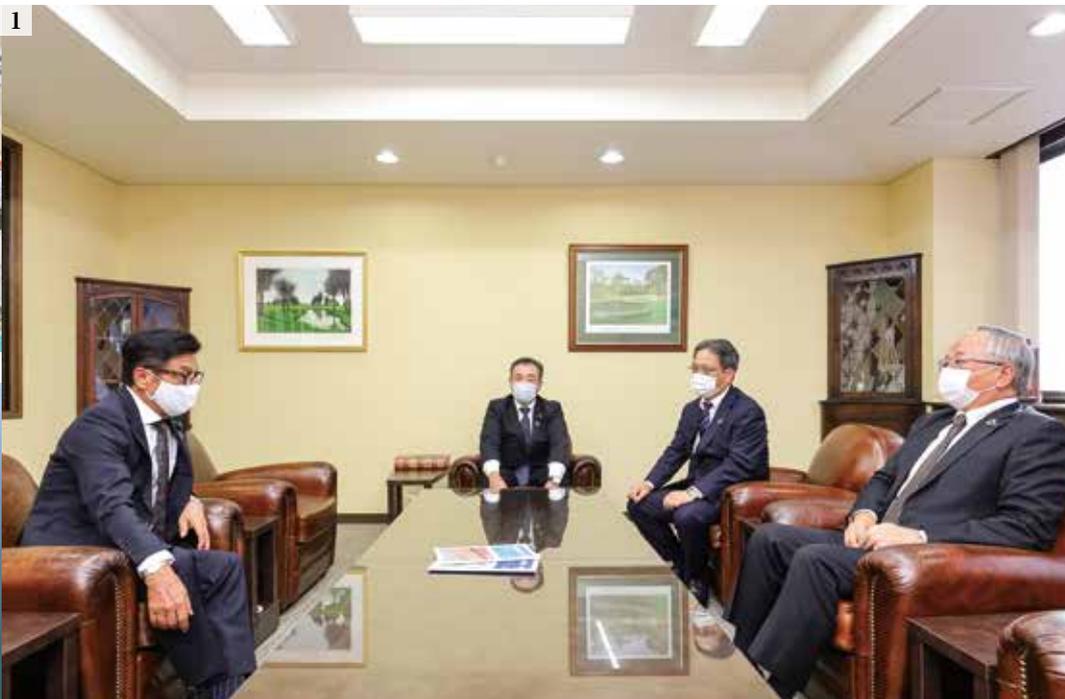
実は、私の父であり前社長の山口正人は、当社の創業時は在籍しておらず、長く長崎県庁の港湾課に勤務していました。退職後に大手海洋土木会社に転じ、業界でもその手腕が認められ、1973年に「経営を引き受けてくれないか」と要請を受けて「地元長崎を支える仕事がしたい」との思いで当社の代表

取締役就任に就任した経緯があります。父は職人気質だったので常に技術を磨くことを考えていました。父の代から続いている浮棧橋の設置は当社の技術力を代表するものの一つで、大手企業と共同開発したコンクリート構造に発泡スチロールを内蔵する技術は、安価で耐久性に優れた浮棧橋の製造が可能となり全国各地で利用されています。このように磨き続ける技術と堅実な経営が評価され当社は徐々に規模を拡大しました。

現場で学んだ経験と養われた感性で 事業の多角化へ

元々、私は会社を継ぐつもりがなくプロゴルファーを目指していました。大学生活はそれぞれ、ゴルフ漬けの毎日でしたが、猛特訓のおかげもあり、日本代表に選ばれて「アジアサーキット」などメジャーな大会へ出場を果たしました。しかし、世界トップクラス選手の実力を肌で感じたことでプロを目指すことに迷いが生じ、そんなときに父から入社をお願いされて悩んだ末に入社を決めました。

プロの道へは進みませんでした。ゴルフのおかげで築けた様々な分野の方との人脈と





山口社長

多様な考え方を学ぶことで養われた感性が、現在の私の経営スタイルを形成したと思います。また「ゴルフは人なり」と言いますが、相手のプレーを見ながら学ぶべき点や意外な面を知り、人を見る目が養われたことも経営に役立っています。

入社後、最初は総務部へ配属になりました。理由は会社を幅広く理解してもらうためだったそうです。総務部の後は現場への配属など広く経験を積み、副社長を務めるまでになりました。広く経験を積むなかで公共工事という「待ち受ける」仕事ではなく、こちらから「攻める」営業に変えたいとの思いが募り、最後は「技術力と人材を活用して事業を広げたい」と父に直接訴えました。そして、42歳を迎えた1997年に「それならお前が社長に

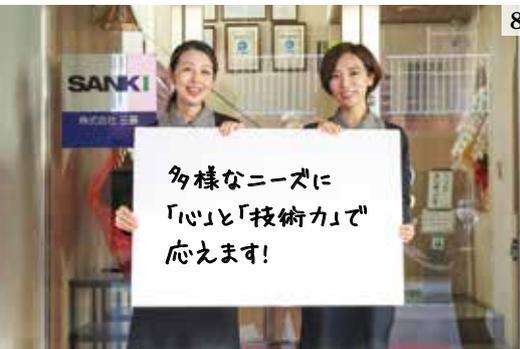
なつて思うようにやれ」と言われ社長に就任。父は多くを語りませんでした。その時には私の仕事ぶりを認めてくれていたのではないかと思います。

培った技術と人材を活用して 文化財発掘からバイオマスまで発展

私が社長に就任してから現在までに、土木、港湾、建築、埋蔵文化財発掘、バイオマス、太陽光発電など6分野へ事業を拡大しました。

創業当時から続けている土木、港湾事業は技術を生かして長崎港の港湾施設整備、長崎市のJ-R長崎駅周辺土地区画整備などの工事を受注し、建築事業では長崎市の東長崎地区方面にあるマンションの新築工事などを安定して受注しています。

事業多角化の一環である埋蔵文化財発掘事業は、市から頼まれて、「グラバー園」の指定管理者になったことがきっかけです。当初は入場者が伸びず苦勞しましたが、ドラマ「龍馬伝」や、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界文化遺産登録へ認定されたことで長崎への観光客が増え、当社の集客努力も相まって来場者が増加し黒字で終えました。



8 6



4



7



5

- 1.対談風景
- 2.本社フロアを見学
- 3.施工実績：ハウステンボス長島浮棧橋新設工事
- 4.施工実績：長崎港松ヶ枝ターミナル整備工事
- 5.施工実績：アルバガーデングランビュー東長崎新築工事
- 6.コンクリートミキサー船「グラバー」を使用した港湾土木工事
- 7.バイオマスボイラー（長崎県西海市）と内部で燃焼する木質チップ
- 8.企業メッセージ



最前列左4番目から、山口希副社長、山口雅二社長、森頭取、小佐々本店営業部長(十八親和銀行)、前田長崎営業部長(十八親和銀行)

文化財に関わったことで学芸員の資格を持つ社員を養成できて、その時代に長崎の歴史について学ぶ出来事もあり、当社の技術も含め全てを生かすことができるものはないかと考えたときに埋蔵文化財発掘事業へたどり着き、現在まで続けています。

また、これからは再生可能エネルギーが重要になるという観点のもと、バイオマスボイラーの製造設置も行っています。元々は海外のバイオマスボイラーしかなかった時代にお取引先から国産はないのかというお問い合わせを受け、なければ作ろうということで開発へ動きました。地球温暖化の防止、循環型社会の視点から開発に着手し、独自の技術によってCO₂の排出を抑えて燃焼効率が高いバイオマスボイラーの開発に成功。生ごみや木くずなどの廃棄物を処理し、熱源は温水プールや温浴施設の暖房などに利用でき、長崎県内から福岡県、遠くは関東の自治体や農業関係法人などに納入しています。

事業拡大を続けていますが、全ての根底には創業当時から培った技術を生かせるかという考えが存在します。全くの他業種へのお誘いもあるのですが、当社には私の父である先代社長からいただいた「原点に帰れ」という言葉

があります。この言葉通り、当社の原点は港湾土木工事の技術力と考えているからこそ事業拡大しても、その技術が生かせる事業のみを行っているのです。これからも原点を忘れることなく経営に邁進したいと思います。

「人」・「心」・「技」を融合し 地域創生事業に取り組む

来年、当社は創業70周年を迎えます。少数精鋭による足腰の強い会社、働くことを楽しめる職場を目標にして、人材育成のため人事評価制度や資格取得をサポートし、有給休暇制度や育児・介護休暇制度など福利厚生も充実させています。最近では新型コロナウイルス対策として現金10万円を全社員に給付しました。

また、時代は大きく変わっています。AI、IoTが進展する一方で少子・高齢化が進み、長崎県では人口流出が深刻です。新型コロナウイルスの感染拡大によって、国や自治体の予算は感染症対策が優先され、土木・建設関連の予算が縮小すれば業界は大打撃を受けます。さらに生活様式の変化は社会全体に大きな影響を及ぼすでしょう。

当社は変化する時代にあっても創業以来のスピリットを大事にし、「人と環境の共生」をテーマに事業を進めています。すでに新しい時代を展望し「地域創生事業」を検討中です。その一つが全国の過疎地で増えている「廃校の活用」です。施設やグラウンドでバイオマスボイラーや太陽光を活用したエネルギー循環、陸上養殖、水耕栽培などによって働く場所と住みやすい環境をつくり、災害が起こった場合は避難所になります。当社が蓄積してきた総合的な技術をこの事業で活用し、誰もが住みやすい環境を提供することで、県外からの定住者の増加、そして働く場所が増えることにより、人口流出の歯止めの一助になれば嬉しく思います。

私は「従流志不変じゅうりゅうしふへん」という言葉座右の銘にしています。「時代の流れには従いながら、志は変えない」という意味です。「原点に帰れ」という父の志を大切にしながら、「攻め」の精神を持ち続け、時代の変化に応じて進化し続ける企業でありたい。そして、技術の新時代にあつても、創業当時から変わらない「心」を多くの方々にお届けする企業であり続けたいと思っています。

■ インタビューを終えて

十八親和銀行 取締役頭取 森 拓二郎



港湾土木業から出発され、「人と環境との共生」をめざし、建築、バイオマスから埋蔵文化財発掘まで多方面で活躍されています。高い技術力と少数精鋭による堅実な事業は県内外のユーザーから高い評価と信頼を得ています。さらに、「人材」「心」「伝統と最新の技術」を生かした総合力で「地域創生事業」を試み、長崎の地域振興のため全力で取り組まれています。

来年、創業70周年を迎えられますが、これからも原点を忘れることなく挑戦し、「進化し続ける」企業として発展されることを期待しています。